

# 子育て奮闘記⑤

寝苦しい朝。遠くで何かを言いあっているのが聞こえる。意味不明な鼻歌(長女?)。そして泣き声(長男?)。そんな一日の始まりに、目覚まし時計はいらぬ。

「今何分?」「四十九分。」「(ドタバタと走る音)行ってくるよー。」「待ってよー。まだ髪結べてないよー。」「忘れ物してるよー!」

実に賑やかだ。すっかり目も覚めてしまう。そんな賑やかな我が家。これがあと何年続くのかな。成長するに従い、大人しくなっていくのだろうか。それはそれで寂しいのかもしれないが、まだまだ想像もつかない。そんな我が家のリーダーである、長女の自然の家に關するエピソードを今回書こうと思う。

小学五年生、初めて親元を離れる自然の家。我が子の行き先の場合、二泊三日で主に山登りを行う。靴、ジャージ、水筒……。一体どれだけ新たに準備が必要なのか。出発まであと二週間ほど。説明会資料を基に慌しく準備が始まる。準備品の中で先生から「お子様には絶対に秘密に提出してください」と依頼されたこと。それは【ハートフルメッセージ】の用意だった。二日目の夜に先生から子どもに渡され、女の子は特に感動して泣いてしまうようなのである。子どもたちが全員寝静まったあと、妻はいそいそと手紙を書き始める。「あなたも書く?」と妻に勧められるが、どうも照れくさくて書けない。遠慮してしまっただけ。



私の気持ちを代弁して、手紙には次のようなことが書かれていた。  
「いつもきょうだいの面倒をみてくれてありがとう。三人一緒にいると、すごくうるさい

など思うこともあるけど、誰か一人いなくてすごく静かできみしいね。恋バナするって言ってたけど、お友達と話せた?山登りはしんどかった?雨降らなかつたかな?あなたがいないくて、こちらはきつと弟と妹がショボンとしていることが簡単に想像つきます(笑)この間の人権作文にあなたは『私はこの家に生まれて幸せだ』って書いてくれてたね。そう思ってくれてありがとう。嬉しかったよ。それなのにいつも怒ってばかりでごめんさい。あなたがいるから仕事がんばれます。どんなことがあったか、思い出話帰ってから聞かせてくれるの待ってるよ。気をつけて帰ってきてね。」

あつという間の二泊三日。いよいよ帰ってくる日。「いつも通りに学童に帰ってくるんだよ」と出発前に言うおいて、実は早退した妻が内緒で学校に迎えに行こうとしていた。学校に着いた頃は、終わりの集いなるものを校庭で行う最中だったそうだ。「なんでママいるの?」驚かせることに成功。帰り道、雨が降る中、山登りしたこと、朝食のメニューが豊富すぎて大変だったよ、なんて思い出話がつきない。

そして手紙の感想。「あの手紙、どこで買ったの?私たちが寝たあと?全然気付かなかったよ!」よし、成功。「こっそりすみっこで泣いちゃったよ……」なんとなく想像していたが、やっぱり泣いたそうだ。そして思いがけず、手紙の返事が返ってきた。必要かもしれないから、靴に忍ばせておいたメモ帳。「メモ帳見てみて!」という娘に促されて開くと最初のページに「いつもは直接言えないけど、ありがとう。感謝してます。」なんて返事が書いてあった。五年生にもなるとなかなか気難しく、時に反抗的に、かと思えばやたらと甘えてきたり……。頭を悩ますことも多々あるが、親に「感謝してます」なんて言うてくれるほど、立派に成長してくれているんだなと、気持ちが込み上げてくるものがあつた。

笑い話だが、帰宅して靴の中の物を開ける。沢山の衣類の中、余るはずのない衣類が一手手

付かずのまま出てくる。それもそのはず、出発の日に着ていった服をなぜか着て帰ってきているのだから。普段、どこに出してもしつかりもののお姉さんで通る娘でもこれである。「友達と三日も一緒にいられるんだよ。何話そうかなあ。」なんて浮かれて話を満足に聞かなかつたのが原因だろう。あと三年後、息子が出発するときにも、また準備に奔走することになるのか。息子の性格を考えると、それこそ日付毎に衣類を個包装して、より細かく靴の中身を分ける必要があるな、という気付きがあつた。(森)



## 数学の途中式

数学の問題を解く上での途中式の大事さを何とか伝えたい。授業や宿題における生徒のノートをみると、間違いの大半は途中式をきちんと書けていないことが原因だと思ふ。だから、授業中でも時々、途中式の大事さのたとえ話をする。

例えば、サッカーで遠くからシュートを打つてもゴールが決まることはほぼない。パスを上手に繋いでゴール前までボールを運び、最後に相手ゴールの隙を狙ってシュートを打つことでゴールを決めることができる。途中式を書かないのは遠くからシュートを打つと同じだ。つまり、ゴールを決めるまでのパスが途中式だ。

あるいは、探偵もののドラマ等で、何の根拠もなく突然、「犯人はあなたです!」と決めつけるシーンを見ることはない。必ず様々な手がかりや証拠から、犯人の動機やアリバイを推理・整理し、論理的に説明した上で、「犯人はあなたです!」というはずだ。もうわかると思うが、犯人を論理的に追い詰めていく過程が途中式だ。中学校での数学(もつと言えば小学校高学年の算数から)では、与えられた式を計算して答えがすぐに出ることは少ない。数学のルールに

従って、答えを出すまでの論理的な過程を書いていってやつと答えにたどり着く。それは頭ではわかってはいるのかな、とは思ふ。しかし、ノートを見る限り一発で答えを出すような時間短縮に走ってしまっている。それは、もしかしたら最終的に自分が導き出した答えが合っていないば点数をもらえないという科目特性も原因のひとつかもしれない。とにかく途中式を省いても合っていないという考えが非常に多い。しかし、それでは正答率が安定しないのも事実だ。それも日々の授業や宿題で、「二応」、肌で感じているはずだ。

しかし、例えば英語ではどうだろうか。「私は毎週日曜日に自分の部屋を掃除します。」という文を英語に直す問題があつたら、全文英語で書くはずだ。「毎週日曜日に」の部分省略したら×になる。単語のスペルももちろん省略できない。

また、創学舎での英文テストや単語テストの練習も五回なら五回、同じ内容を省略せずに練習するはずだ。それでも英文テストで毎回満点をとるのは難しい。繰り返して練習し、繰り返してテストを行い、やつと良い点数をとれるようになり安定してくる。

何が言いたいかというと、数学も上記の英語の例と「同じ」ということだ。途中式も含めて書くことが、「問題を解く」ことであり、それを「練習」するのだ。全文省略せずに練習する英文テストでも毎回満点をとるのが難しいのだから、数学で途中式を省略してはテストで満点などとれない。

よく、「この途中式は省略してもいいですか。」という質問を受けることがある。それを聞いて私は、とにかく効率化・時間短縮を図りたいのだな、と思ふ。熟練すれば省略してよい途中式は確かにある。それは熟練の度合いを見て授業の中で指示していく。それまでは、とにかく板書に示した方法をそのままコピーしてほしい。板

$$= u_0 \frac{a}{Nz} \sum_{j=1}^{(N-1)} \left( \frac{N-j}{a} \right) + \frac{4u_0}{3\lambda+2\mu} \frac{r}{N^2 z^2} + \dots$$

$$\left( \frac{4u_0 a}{3\lambda+2\mu} \left( \frac{1}{Nz} \right)^2 \left\{ \sum_{j_1=1}^{(k_1)} \sum_{j_2=1}^{(k_2)} \dots \sum_{j_n=1}^{(k_n)} \right\} \right) \times$$

$$\left( \frac{4u_0}{3\lambda+2\mu} \left( \frac{1}{Nz} \right)^2 \right) \sum_{j_1=1}^{(k_1)} \sum_{j_2=1}^{(k_2)} \dots \sum_{j_n=1}^{(k_n)} \cos u_0 \dots$$



書では五行にわたって途中式を書き答えを導き出しているのに、生徒のノートを見ると三行で終わっていることがある。そういうノートを見たらすぐにどこかの式を省略したとわかる。それを注意すると、「自分はこっちの方がやりやすいです。」という意見がでるときもある。しかし、各自の方法で解くと符号等のミスや、そもそもの論理的な間違いにつながる恐れがある。何千年もかけてつくられてきた学問だから、それに従うのが点数を上げる一番の近道である。

さあ、丁寧にパスを送る気持ちで、あるいは犯人を追いつめる気持ちで途中式を書いて答えを出す習慣をつけよう。大変だと思いかもしれないが、どの科目も楽な道はない。一緒に頑張っていこう。(本多)

# 「野球をやりたいかった。」

●昨年末、孫が生まれた。自分もずいぶん年を重ねてきた、とあらためて思う。と同時に孫のことは勿論、家族全員のこと、自分の兄弟の家族のこと、お世話になった方々のこと、友人たちのことなどいろいろなことが気になり始めた。楽しかったこと、感謝していること、不義理をしてしまったこと。毎日何かしら考えている。



●一方で、やり残したこと、やれなかったことへの後悔も多い。野球もそのひとつである。  
●子供達だけで集まってやる野球で、小学生のときはピッチャーをやっていた。毎日楽しかった。中学になると一変した。先輩はこわい。すぐに怒るし、「けつバット」がとぶ。びくびくして練習をしていた。一年生の秋。新チームになって「二年で誰か投げたい奴いるか？」と声がかかった。みんなが、「お前やれよ。」とすすめた。しかし、私は、少しフォームが変則(ヤクルトの成瀬のような投げ方で、先輩に何か言われるのを心配した。そこで引いてしまい、かわりに友人が「おれが投げます。」と名乗り出た。そして運動神経も良く、私より気も強い彼がそのままピッチャーをするこ

ととなった。

●中二の秋になった。自分達が中心の新チームの誕生。私はセンターを守っていたが、まあ普通。部員は一学年十人ぐらいの規模だから試合には出られる。副主将にされて、スタートした。そして九月のある日。当時の郷土のスター、プロ野球にピッチャーとして入団した先輩が学校にやってきた。肩を痛めて治療中で、当分実家にいるとのこと。みんな驚き、残念に思い心配した。一方で、実はそれが私に幸運をもたらした。

●先輩は、毎日母校に顔を出した。数日たつたとき、センターを守る私を先輩が私をよびよせた。「お前ピッチャーをやれ。俺が教えてやる。」嬉しかった。しかし大喜びはしなかった。エースが隣で悔しそうに顔をしているのを私は見逃さなかったから。顧問の先生も「やってみる。」ということで指導が始まった。先輩は毎日来た。(完全なアマプロ協定違反である。)先輩は、私だけ教えた。リリーフ役もいたけどそれも無視。私は、「他の人にも教えてやればいいのに……。」



●実には悩みがあった。視力の低下である。メガネが実は必要だったが、母子家庭で生活保護をうけている貧困の中、母に買ってくれとはいえない。守備のときもよく見えないのが恐かった。エラーをして迷惑をかけたことも何回かある。バスターボックスにたつと相手のピッチャーが投げられるまでは、眼を細めてみていた。打ちに行く瞬間は眼を細めていられないのでボールを見失う。「カン」で打っていたようなものだった。

●そして、マウンドに立つと、サインが全くみえない。キャッチャーミットは何とみえるが、球を置きにいつてしまう。試合で投げる自信はでてこなかった。  
●中三になった。先輩は、公立の進学校で、有名

な監督(先輩の恩師)がいるところをすすめてくれた。裏では、もつと動きがあったかもしれない。顧問も私を公式戦で使うことを考え始めた。球はどんどん速くなった。でも私は全力投球はしていなかった。先輩は、相変わらず毎日来て私を指導してくれた。

●結局諸事情もあり、私は投手として活躍することとはなかった。自分から引いたのである。高校は学区制の制約があり、先輩がすすめた所には行けなかった。高校でこそ野球を思いきりやろうと入部し、新しい生活が始まった。しかし、今度はもつと大きな壁が立ちはだかる。硬式のグローブが買えない。週末に遠征して試合があるのだが、交通費がない。ユニフォームが買えない。メガネも買えない。学校の勉強も大変。私立大学には絶対通えないという条件の中で手を抜く訳にもいかなかった。

●そして、私は、高一の一学期で野球をやめるのである。今、あの頃のことを思い出される。そして悔やまれる。もつとやりたかった。自分の弱さもなさない。先輩には勿論感謝している。そして申し訳なくも思っている。

●さて、二十八才のころ、ある出来事があった。子供を連れて日立のレイソルグラウンドに出かけた。交通フェアということで、様々なイベントがあり、大勢の人が来ていた。野球場の前を通りかかると「スピードガンコンテスト」とある。「希望者はもういませんか?あと五分です」の声がハンドマイクから聞こえる。みるとユニフォームを着た人達が数十人。「よし、やってみるか」と思い、走った。「しまった、サンダルだ。でもいいや。」結局、はだしでマウンドにのぼる。十数年ぶりに握るボールは不思議な感触。昔のことを思い出しながら投球練習三球。足がすべる。ぎこちない。いよいよ本番。三球。一球目一三四キロ。二球目一二〇キロ。足がすべる。三球目はアンダースローで投げた。一三六キロ。

●そして、結果発表。なんと私が優勝であった。周りがざわざわしている。何しろ、短パンで裸足の男が最後にやってきて優勝してしまったのだから。先輩のことが思い出された。先輩のおかげです。そして済みません。それから、いろんなことが思い出された。自分は何故中学のとき、妙な気遣いをしたのだろう。サインなんか見えなくても、ど真ん中に投げればよかったのかもしれない。「おれがやる。」ともつと強く主張すればよかった。

●そして、力を出し切れなかったことの原因を考えると、自分の心の弱さ、未熟さに思い至る。野球を例にとれば、こんな風だった。自分からヒットを打って得点が入ると私は喜びつつも心の中で「ごめん」と相手のピッチャーに謝っていた。バスターボックスに入ると、打てなかったらどうしようと思っていた。守っているときは、ボールがこないようにと思っていた。先程述べたように、ピッチングの練習のときも、エースに気をつかってスピードをセーブしていた。大人になって、友人に話すと、「お前はおかしい。スポーツはお互い全力を尽くして、喜び、悔しがる。それだけだろう。」といわれた。親友からは、「お前は幼稚だ。気持ちの整理が全くできていない。」と核心をつかれた。

●実は生徒をみると、まさにこの「気持ちの整理」ができない人が多い。毎日、いろんなことがあって、自分に責任のないことも、相手の何気ないひと言とかも、親とのいさかきも、がんばれない自分へのいらだちも、進まない勉強への不安も、ぐちゃぐちゃになって自分の心のためにいる。集中なんかできるはずもない。そうしているうちに時は過ぎていく。動けないくせに、志望校は下げられない。八方ふさがりである。

●こういう生徒達を「よしやろう」という気にさせ、支えるのが私達の仕事。志望校の決定は、九割の生徒が適切である。本気でがんばれば可能性は十分にある。気持ちの整理を手伝って、適切な方法を伝え、「自分もやれる」という手こたえを味わわせたい。さあ、チャイムが鳴った。(小林)

### ▼▲継続希望の方へ▲▼

- ▶退塾や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送りいたします。
- ▶在籍していた教室までご連絡ください。